

## 〔概要〕

本研究では、「真宗王国」といわれる富山県において宗教的マイノリティであるキリスト教に焦点を当て、県庁所在地の富山市のキリスト教会で形成されているコミュニティやそこで生まれる場所への愛着について調査した。調査を依頼した富山鹿島町教会で婦人会のメンバーを中心に聞き取り調査を行い、教会に来るようになったきっかけや現在の通っている状況などを回答してもらい、彼女たちにとっての教会の役割やコミュニティ形成の過程を明らかにした。教会では同じ宗教を信じる者同士が集まり、キリスト教の教義や価値観、お互いの状況を共有することで仲間意識が強まり、地域社会とは別のコミュニティが生まれている。また、教会員たちは自らの所属している教会の礼拝にしか基本的に参加しない。このことは、同じ教会でも自分の通っている教会に特別な意味を与えていることが分かる。この要因の1つとして考えられることは、日本におけるキリスト教の歴史と今回調査した教会がプロテスタントであったことである。教会員の中には、キリスト教やその信者への偏見、家族や地域との関係に苦勞しながらも教会に通っている人がいた。富山県以外の出身で周りに頼れる人がおらず、助けを求めて教会へ来ていた者がいることも分かった。教会には様々な事情をもつ人々が集まり、キリスト教という宗教を通してコミュニティを形成する。そして教会の中のコミュニティに強いまとまりがあるからこそ、同じ教会に通い続けて教会という場所に愛着が生まれると考察した。

**キーワード：**コミュニティ，場所への愛着，キリスト教，プロテスタント・キリスト教会